
遠野森のがっこう
「子ども第三の居場所事業」
2024年度 活動報告書

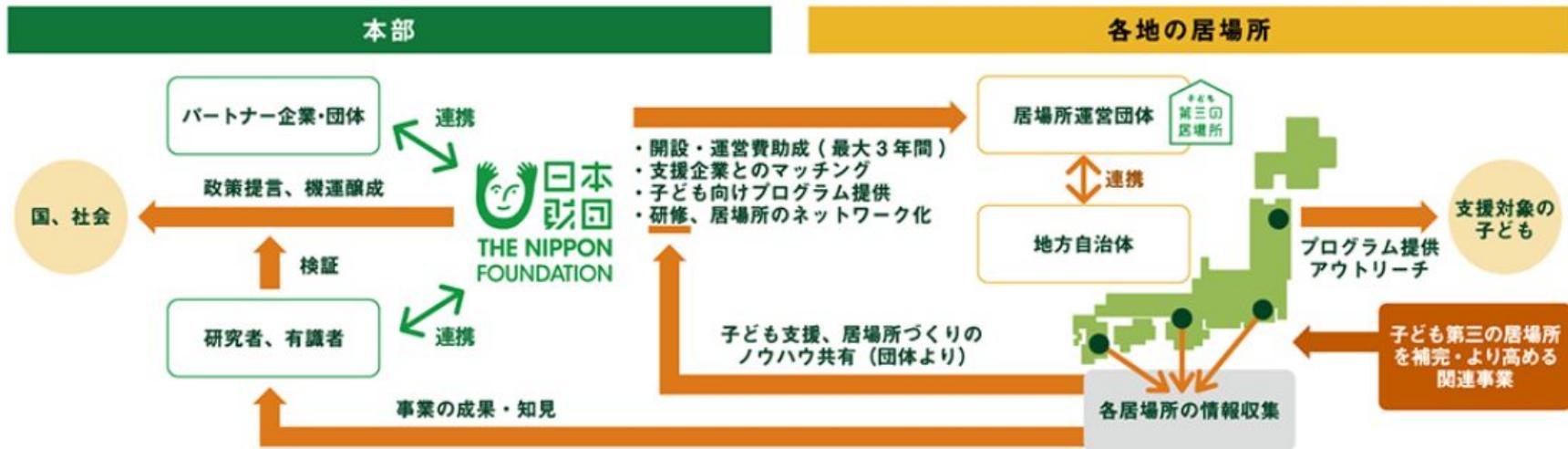
作成:2025年4月30日

「子ども第三の居場所」事業の目的

生き抜く力を育む「子ども第三の居場所」の運営を行う。
行政、NPO、市民、企業の方々と協力し、誰一人取り残さない地域子育てコミュニティをつくることで、「みんながみんなの子どもを育てる社会」を目指す。



日本財団による事業展開



地域の実態や子どもの成長にあわせた居場所モデルを用意し、適切な支援が行えるようにしている。日本財団は、「子ども第三の居場所」運営団体に対し、運営費の助成、ノウハウの共有、支援企業とのマッチングなど、さまざまな運営支援を行う。

※全国の「子ども第三の居場所」: 248拠点 (2025年3月末時点)

一常設(包括)ケアモデル 67拠点/学習・生活支援 49拠点/コミュニティモデル 132拠点

岩手県遠野市における「子ども第三の居場所」コミュニティモデルの運営 事業概要

- (1) 期間: 2024年4月1日～2025年3月31日(2年目)
- (2) 場所: 岩手県遠野市附馬牛町上附馬牛 19-529
- (3) 対象: 小学生を中心に、子どもから高齢者まで
- (4) 内容:



- ・子どもとの1対1の関係性を重視しながら、安心して過ごすことのできるもうひとつの居場所を提供する。
- ・学校や家庭とは違った様々な人が集うコミュニティの中で、みんなで子どもを見守り、子どもたちの 自己肯定 感、人や社会と関わる力、生活習慣など、将来の自立に向けて生き抜く 養育む。
- ・遠野の豊かな自然環境や文化を活かし学ぶ、野外キャンプや森探検等の自然体験プログラムや、調理や畑・田んぼ仕事等を行う生活体験プログラム、地域の先人たちの協力による手仕事の体験プログラム等の多様な体験による 生きた学びの機会を提供することで、家庭や個人の抱える困難による体験格差を解消する。



遠野
森のがこ

「オッホーの森の家」の施設概要

◆遠野森のがっこうフィールド内の施設

- ・ 名称 : オッホーの森の家
- ・ 設計 : カクタ設計
- ・ 施工 : 丸順工務店
- ・ 竣工 : 2024年4月30日
- ・ 延べ床面積 : 約165㎡
- ・ 構造 : 木造2階建て
- ・ 施設概要 : リビングスペース、キッチン、トイレ、シャワールーム、スタッフルーム、多目的室



「遠野森のがっこう」で行っている支援の内容

- ・小中学生対象の送迎支援(遠野市内、利用料無料)
- ・学校の長期休み期間中を中心に、おやつや昼食の支援(児童と一緒に調理を行い食卓を囲む、昼食支援利用料500円)
- ・学習支援(児童の宿題の見守り等)
- ・体験プログラムの提供



「遠野森のがっこう」のオープンデー

・オープン日程

一月・水・金曜日 13:00-19:00

一土曜日・祝日・学校の長期休業期間の平日10:00-18:00

・オープン時の活動内容

一オッホーの森での自然体験

一田んぼ、畑仕事体験

一調理体験、食事

一屋内あそび

一宿題、学習見守り など



「遠野森のがっこう」で提供した主な体験プログラム

- ・もりっこキャンプ

(長期休み期間などに年複数回開催)

- ・小学生向け森暮らし体験「おひさまのねっこ」

(通年開催)

- ・アーティストとのコラボワークショップ「遠野森のファンタジー」(2日間の影絵WS)

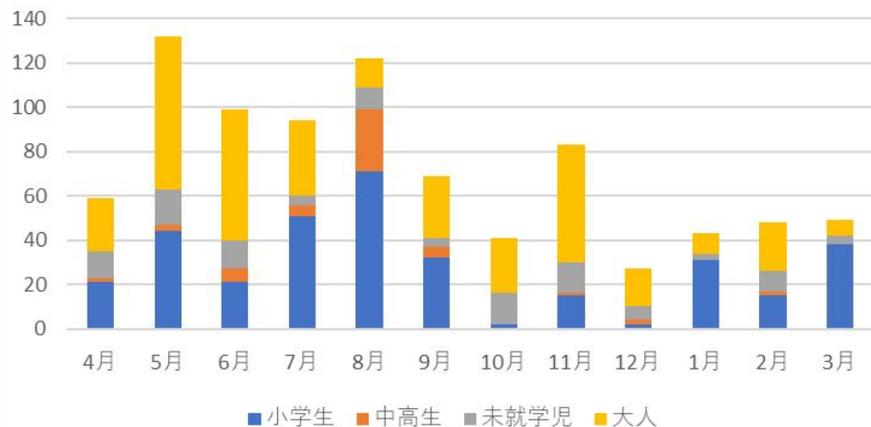
- ・シャワークライミング(夏季)

- ・わら細工体験 等

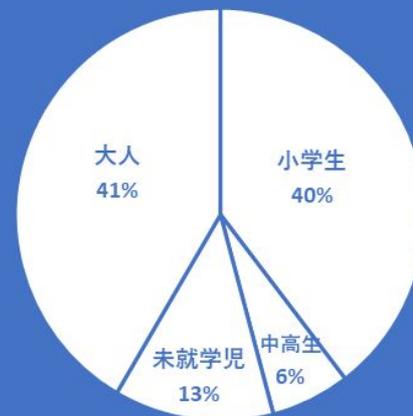


「遠野森のがっこう」の利用者数

月ごとの世代別利用者数



世代別利用割合



- ・世代別の利用者数を見ると、小学生と大人の利用が多かった。小学生、大人それぞれの単独利用も多かったが、休日等に保護者が子どもと一緒に利用するケースもあった。
- ・利用者は12月～3月にかけて減少した。特に放課後の利用は冬期間は少ない傾向にあった。
- ・休日(土曜日や祝日等)の利用は、体験プログラムの提供時に増える傾向があった。

スタッフ運営体制

【スタッフ体制】

- ・事業責任者: 団体代表理事。事業実施最終責任者。送迎車の運転も担う。
- ・運営マネージャー(常勤スタッフ)1名: 教員免許保有。児童館での勤務経験、自然体験活動の指導経験あり。拠点運営業務全般を担う。送迎車の運転も担う。
- ・非常勤スタッフ3名: 拠点運営サポート、拠点環境整備等を担う。
- ・ボランティアスタッフ: イベント開催時を中心に、1日当たり3名程度。イベント運営のサポートを行う。

【運営の工夫】

- ・スタッフと定期的に面談やミーティング、拠点として目指すことを話し合ったりしている。非常勤スタッフが多く常に全員が顔を合わせられるわけではないが、スタッフ同士の認識のすり合わせやコミュニケーションがとれている。
- ・特に体験プログラムの提供時には、大学生や元保育士の方などが、ボランティアとして運営のサポートを行ってくれている。拠点の理念に共感し、学びたいという姿勢で参加して下さるため、WinWinの関係性でお手伝いいただけているのではないかと考えている。

児童、保護者、家庭の状況

- ・不登校という分類には入らないかもしれないが、学校のコミュニティになじめない児童が、放課後や学校を休む日の日中に利用するケースが増えている。
- ・せまい地域コミュニティの中で保護者自身が悩みを誰にも話せずに抱えている現状も見えてきている。できるだけ保護者の第三の居場所ともなれるよう、心がけて対応している。
- ・ひとり親世帯で、子どもが発達障害のご家庭とつながることができた。保護者からは、ずっと行かせたいと思っていたが、子どもが発達障害で周りに迷惑をかけるのではないかと思い行くのをためらっていた、という話を聞いた。イベントに参加してくれ直接話すことができたため、利用しても良いと安心していただきその後の利用につながった。施設の存在を認知してもらえるようになったが、直接会話ができないと実際の利用にはつながらないと思った事案だった。
- ・特別支援学級に通う児童の保護者が、様々な体験をさせたくて体験イベントに申し込むが、発達障害があることで受け入れを断られることがあるという話をしていた。遠野森のがっこうは普段の利用者もそれほど多くない分、発達障害などケアがある程度必要な子どもの受け入れも可能なため、とても喜んでいただいている。親御さんの悩みも深く、スタッフ個人が親御さんの悩み相談を受ける機会も増えた。ただし現場スタッフで力になれる領域を超えていると判断したため、専門家に相談してみることも勧めた。
- ・家族の都合で一時的に市内に滞在してたオーストラリア国籍の小学生が、その期間居られる場所がないとのことで、1か月程度施設を利用してくれた。なかなかないケースではあったが、必要な役割を果たすことができたと思う。

情報発信の状況

- ・HP、Instagram、Facebookでの情報発信

一子どもがいる家庭は、SNSを見てまずはイベントへの参加から、施設の継続利用へとつながるケースが多い。

- ・定期的な通信の制作、発行

一紙媒体の発行物があることで、地域の幅広い年齢層に対して発信を行うことができている。地域の大人は、紙媒体のお知らせを見て施設を訪れる人が多い。

- ・リーフレット、ポスターの配布、掲示

一本オープンに合わせてリーフレットとポスターも制作した。市内の子どもを持つ家庭が立ち寄る図書館などの公共施設、飲食店などの店舗にも配置をお願いしている。

今後の課題

- ・日によって利用者数に波がある。
- ・オープンしてから間もなく1年たとうとしており、SNSや学校に配布する通信、口コミなどで施設の認知は広がりつつあると思うが、まだどのような施設であるのかしつかり情報が届いていない家庭もあることと考えられる。「困難を抱えている子どものための施設」「子どもしか利用できない施設」といった間違った認識を避けるために、ホームページや SNSではあえて、子ども第三の居場所事業を行っていることを明示することは控えていたが、明示することで利用しやすくなる家庭もあるという考えもあり、今後の表現・発信の仕方を再検討したい。
- ・現在高学年の利用が多い傾向にあり、高学年は放課後に委員会やクラブ活動、習い事や塾がある児童も多く、月の利用回数が少ない。低学年の児童は、高学年よりも放課後の過ごし方の選択肢が少ないため、低学年の児童により利用を呼び掛けられるよう、方法を考えたい。
- ・困難度の高い児童の利用を増やすために、行政との連携を強め、積極的な提案を行っていきたい。
- ・オープン時は一時的に寄付金が増えたが、その後はあまり寄付収入がなかったため、今後の戦略を検討したい。